

<篠原修 発言メモ>

「流域治水の最前線シンポジウム」基調対談
～治水政策子弟三代から見る日本の河川政策の歴史と思想～

【当日の発言メモ】

- 1) 土木の根本思想―” fail safe” 「失敗しても安全、大丈夫」
 - (1) 鉄道工学で習った。脱線しても転倒、大事故にはならない。通常はカーブなどの区間に添えのレールを設置する。
 - ・例。新潟地震の折の上越新幹線車両。脱線したが大事故にはならず。
 - (2) この思想は伝統河川工法にも存在する。洪水になっても致命的な水害にしない。
 - ・例。水害防備林、霞堤、輪中、水屋など。
 - ・現代の連続堤防による治水計画には、洪水が河川から溢れたらどう対応するか、という、この思想が欠如している。

- 2) 城下町の計画、設計―水をベースにした計画論
 - (1) 日本の都市計画にはお手本があった。
 - a. 中国
 - ・律令時代のお手本は中国の唐（長安、洛陽）。
 - ・平城京、平安京で日本的に完成。
 - b. ヨーロッパ
 - ・明治維新以降のお手本は英、独、仏。
 - ・新しい都市では札幌、町のスケールでは田園調布など、大都市のグリーンベルトはできず。
 - c. いずれもお手本は陸の都市。

 - (2) 城下町は日本オリジナル
 - a. 代表例
 - ・戦国末から安土桃山、江戸初期の都市。
 - ・秀吉の長浜、信長の安土から秀吉の大坂、家康・秀忠・家光の江戸。
 - b. 計画、設計の担い手は河川技術者
 - ・計画のベースは水の計画―防御、舟運、排水、水道（河川、海岸、お濠、掘割運河の整備）。
 - ・河川、お濠、掘割運河の整備を前提に、街路、町割を実施。
 - c. 日本の近世都市（現在の都市の原型）は水の都市
 - ・実感出来る東京の場所；中山道、銀座通り。

- 3) 従って、日本では河川計画と都市計画を一体にして、河川技術者がそのベースを担うべき。それが陸の欧米とは異なる日本の伝統である。